

東京帝國大學 經濟學部 內  
東亞經濟研究所

年四回(二月、五月、八月、十二月)發行

# 東亞經濟論叢

第參卷 第參號

昭和十八年九月二十日

東亞指導國の二重性……………經濟學博士 谷口吉彦

臺灣と東印度……………經濟學博士 目崎憲司

支那貨幣小史……………經濟學士 穗積文雄

支那銀行業務の類型……………經濟學士 徳永清行

孫文の民生主義……………經濟學士 出口勇藏

買辦に關する覺書……………經濟學士 鈴木總一郎

南支那の錫、タンクステンアンチモニー鑛業の性格……………經濟學士 菊田太郎

(裝幀)

書肆 有斐閣 發賣

# 孫文の民生主義 (一)

出口勇藏

## 前 言

京都帝國大學人文科學研究所より囑託せられて、孫文學説のうち三民主義、とくにその第三部の民生主義について研究を行なつてゐたわたくしは、昨年十月、「孫文の民生主義」と題する報告を同研究所に提出した。それ以前、同研究所の機関雑誌『東亞人文學報』第二卷第一號に「民生主義の解明」と云ふ表題で發表したものは、上記の報告の前半の骨すじであり、報告においては、その骨に肉を盛るとともに、殘されてゐた後半部を草したのである。今年の四月、わたくしは同研究所から以上の研究よりも更に廣く、三民主義を全體として研究することを懇願せられた。民族主義や民權主義の研究と云へばわたくしの専攻學科の範圍を出た問題に直面するわけであつて、視野の一層の擴大が要求せられる。この要求に對して應へうるだけの力量をわたくしが有ち合はせてゐると思へず、研究所長の高坂教授のお勧めを受けた時にはためらはざるを得なかつたのであつたが、一つには、大東亞建設に與かる思想建設の重大使命を負つてゐるわれわれには、三民主義に對する對決が實踐的に重要であると考へられるし、また二つには、わたくしの専攻してゐる經濟學の基礎理論の展開のためには、傳統的なこの科學の視野の狭さを打開することが緊要なことからである、と信じてゐるために、三民主義の總括的な研究は理論的に云つても徒事ではない、と思へたので、高坂先生のお勧めを引受けさせていたゞいた。本誌より寄稿を求められた時、先に人文科學研究所に提出した報告の中から、いまだ發表されてゐない後半の部分を掲載して、ここに責任をふさぐことをゆるされた高坂先生に厚く御禮を申し上げなくてはならぬ。事の次第を敘して、本誌の讀者の諒解を併せ求めようと思ふ。(昭和十八年八月しるす)

社會思想を發展史的に且つ思想家の實踐的意欲の知的結晶として把へようとするわれわれの立場からは、孫文の民生主義は二つの時期に分けて考へることができると思はれる。その前期は千九百五年から千九百二十二年まで、すなはち「同盟會」成立の時から九ヶ國條約の締結に至る間であり、その後期はソヴェエトの代表との接觸が深まりはじめた千九百二十三年以後である。このやうな時代區分を行ふ根據と、ここに云ふ前期における民生主義の内容については、わたくしは先にその大約を述べておいた（前記拙稿「民生主義の解明」）。これから取上げようとするのは、ここに云ふ後期における民生主義の内容の検討と、全時期を通じての民生主義思想の特徴づけとである。

孫文の民生主義は、歐洲大戰およびその後の國際的政治情勢と中國國內において慢性的となつた軍閥の跋扈・鬭争、その結果としての國內の分裂等のために、若干の變容を生じたやうに見える。一方ではロシアの共產主義革命の成功、ロシアの新建設、新ロシアの外交政策の轉換は、共產主義思想の中國への傳來・波及とともに、中國革命に新しい要素を附け加へたことが見逃せない。他方では中國内部の軍閥の割據は、孫文の革命運動をししばし危機に瀕せしめるとともに、帝國主義的諸列強の動向は、彼が前期において甘く期待をかけたやうには進んでこなかつた。却つてそれらは中國の分裂的契機と結びついたり、分裂そのものを利用したりすることによつて、革命戦線の統一や發展を妨げつつ、各自の利益の追求をこととしてゐたのである。孫文はこのやうな事態の推移

を見て何をなしたであらうか。彼には革命目的そのものは厳乎として動かなかつたが、その達成のための方策は、事態に應じて機會主義的に變へられ、『物質建設』の甘美な夢から冷水をかけられて目醒めた後の絶望の底から、彼に積極的な援助を與へるやうに見えたものに継りつかうとし、そのために民生主義に若干の變容が見えはじめるのである。けれどもこの變容が果たして民生主義の本質の質的變化と云ひうるであらうかどうか、之がわれわれの以下の問題である。

民生主義思想の後期がソヴィエトとの接觸の深まりとともににはじまる、とわれわれは考へる。しかしながら、前期に屬する時においても、千九百十二年において力を盡して主張されてゐたやうな思想内容は、歐洲戦争の勃發とともに、既に變容の萌芽を見せてゐたのであつた。先づこの事實に着目することが必要である。

『中國存亡問題』(千九百十七年)の一書は中國民族の國際的地位に關する鋭い洞察を含んでゐる。さうしてこの洞察は思想上にも影響を與へずにはゐなかつたのである。民生主義はヨーロッパの政治經濟思想の洗濯の下で初めて成立したものであつたけれども、その思想すらも、ヨーロッパ全體が而してそれに引きづり込まれて全世界が戰亂状態に陥り、無幸の民衆を戦争の惨果によつて苦しめることを、防止し得ないと云ふ事實を目のあたりに見た時、孫文はヨーロッパ人の鬭争的な性格に深い失望を感じなくてはならなかつた。それに比べると、中國人は古來、平和愛好的な根本性格を有ち、その社會思想にはこの根本性格が滲みでてゐるのではないだらうか。之が彼の懐いた懷疑であつた。さうしてこの懷疑は先づ次のやうな新しい要素を彼の思想に生みださせたのである。

千九百十二年、臨時大總統の榮職を辭してのちに民生主義の宣傳に大童になつてゐた時、民生主義は中國の民

衆からは云ふまでもなく、中歐民族の指導層にある人達からも、いな更に彼に従つてゐた革命黨員からさへも、「理想の空言」として迎へられたのであつたが、孫文みづからは革命意慾を遂げるために不可欠の實踐理論であると信じてゐた。けれども歐洲大戰の勃發は、彼のこの信念に動搖を與へずにはゐなかつた。以前の彼は、民生主義の實現は専らヨーロッパの社會思想に雛形を求めて、それを模して生すべき物質的建設に俟つのであると信じ、その雛形の根柢にある人間の心理については、深い注意を拂つてゐなかつた。ところが今やその物質的建設のみによつては社會問題は遂に解決せられず、建設に當たるべき人間の心理や倫理性が、ヨーロッパ人と異なるものとして、確立せられなくてはならぬことに氣付かしめられたのである。すなはち『心理建設』が『物質建設』とならんで必要であることを彼は痛感した。これ、千九百十八年に至つて『心理建設』の名において發表せられるに至つた「知難行易」説の生じた所以である。

「知難行易」説は、孫文が理解する限りでの儒教思想との對決を通して、新しい實踐哲學的思想として主張されたものであつた。この主張は、孫文のヨーロッパ人の倫理性に對する懷疑が彼の反省をヨーロッパの思想とは獨立に自國の傳統の上に注がせた結果、生じたものでなくてはならない。併しながら、われわれはその際彼がヨーロッパの思想の根柢を批判してゐたのかどうかについて、吟味して見る必要がある。この目的のために、われわれはこの説を、われわれの問題に關係がある限りにおいて論じておかうと思ふ。この説が孫文によつてはじめて公けに口にされたのは、千九百十七年七月の『之を行ふは難きにあらず之を知るを難しとす』と云ふ講演においてであつたと考へられる。そこにおいて彼は、「往昔中國の屬國にも等しい地位にあつた日本が中國に教へて

より強國となり、堂々たる上國とも言ふべき中國が反つて之に及ばない理由」は何かと問ひ、それは中國人が、「知易行難」の説に禍されてゐるに對して、日本人が王陽明の「知行合一」の説に従つて「冥行直遂、眞一文字に旺進」したからである、と答へ、しかし孫文がいま中國人に期待するものは、日本人が信奉した「知行合一」の説ではなくして、更に徹底して「知難行易」の説である、と述べるのである。しかもこの新説は支那上古の教へが既に述べてゐるものであり、ただそれを證明した者が未だなかつたと云ふにすぎぬ、と孫文は考へてゐた。孔子の「民は由らしむべく知らしむべからず」や孟子の「之を行ふて著れず、習ふて察せず、終身之に由つて其道を知らざる者は衆である」や商鞅の「民は與に成を樂しむ可くして、與に始を圖り難し」などの言葉はみな、愚民政治思想ではなくして、却つて「知難行易」を説かうとするところに眞意があつたのである（孫文全集、第一公論社版、第六卷、二四九頁以下）。

この實踐哲學的立場は、翌年の千九百十八年に發表せられた『心理建設』において、最も明瞭である。さうしてそこでの主張はあらまし次のやうなものである。——中國文明の發達は、草昧時代より周に至るまでの進歩の時代と周以後の退歩の時代とに大別することができる。前者は「知らずして之を行ふの時期」すなはち「知難行易」が行はれた時代であり、後者は「知易行難」の謬説が中國人に深く浸潤することによつて生じた「先づ知るを求めて後に行ふの時期」である。本來人類の進化は歴史の法則であるが、われわれが前期の民生主義の解明を通して了解したやうに、之は孫文がヨーロッパの社會思想から獲得した中心的な歴史哲學的思想である——中國の歴史が、周以後、この法則に背いて退歩をつづけてゐるのは、専ら上の謬説が中國人の心性を蝕んで來た

めである。この悪しき中國の傳統から自由になつた現代人・孫文の眼光を以てすれば、世界人類の進化は、草昧時代すなはち「知らずして之を行ふ」時期、文明時代すなはち「行ふて後之を知る」時期、および科學時代すなはち「知りて後之を行ふ」時期の三つの時代區分を有つのである。さうして歐米諸國はこの進化の過程を「知易行難」の謬説を有たなかつたがために、順序を追つて辿つて來たのである（前掲、第二卷、九七頁以下）。かく述べて、孫文はここから彼の人間學——人間を「先知先覺者」と「後知後覺者」と「不知不覺者」の三つの範疇に分ける人間學を展開して、「知難行易」説を完成するのであるが、われわれにとつては、この人間學、この實踐哲學的思想そのものがここで深く究明さるべきであるのではない。ただ孫文の思想が、歐洲大戰の末期において、周以前の古典的な支那思想に據り所を求めはじめたと云ふことに注意するとともに、しかもその據り所はその純粹性において據り所となつたのではなくして、孫文が以前にヨーロッパの思想から得た近世の進歩思想から見直されたのである、と云ふことに一層深い注意を拂はねばならないのである。

しかるに、『物質建設』の中國語譯に附した孫文の序文（千九百二十一年十月）は、彼のヨーロッパ思想との離反、中國の古典思想への接近を、一層よく示してゐるかに見える。なぜなら、そこでは中國の國際的開發案が、ひとり中國の利益になるのみでなく、また列強の戦後の生産力の維持のために必要であり、それらの利益とも一致するだけでもなく、實に中國が「臨機應變、能く今日の世界經濟場裡に馳騁し、彼の族（歐米諸民族——引用者）の競争の性を化して我が大同の治に達せしめ得るであらう」ことが期待されてゐるからである（第二卷、一九七頁）。民生主義政策が世界平和に貢獻すると云ふこの視野の擴大は、古典的支那思想を據り所とし、ヨーロッパの文明

思想を批判し、独自の境地に立ち得た人の言葉と受取れるであらうか。われわれはそのやうには考へ得ない。なぜなら、「大同の治」とか「大同世界」とかは、その時までの孫文に見ることのできなかつたものではなく、たとへば千九百十二年の『臨時大總統就任宣言』や『五族聯合の效力』にも見いだせるものであつて（第四卷、二二頁。第六卷、八三頁）、そこでは單に中國民族が一民族國家として國際場裡に立つことによつて、世界が平和状態に赴くことができると云ふだけの意味が寓せられてゐるからである。また上記の序文にしても、この二つの書き物にしても、何れも中國人の思想的傳統に對する感覺に觸れて、自説の啓蒙的な効果をねらつて書かれたものと云はざるを得ないからである。

要するに、前期の民生主義思想が、歐洲大戰の勃發とその中國に與へた影響とのために、動搖を示しはじめた時においても、孫文は中國の古典思想を全く消極的にしか把へてゐなかつたと云はなくてはならぬ。本質的にはヨーロッパの近代的民主主義的思想が、従つて經濟的には資本主義的思想が、その根柢にあつたのである。中國における共產主義思想の傳來は、千九百十九年の「五・四運動」において、最初の社會主義運動を起さしめた。それは單にインテリゲンチアアの社會運動にとどまるものではなかつた。孫文はこの動向に對していかなる態度を取つたであらうか。後期における民生主義の變容を述べるに當つて、この問題をも豫め解決しておかなくてはならないであらう。

この問題に解答を提供してゐるものに、『戴季陶氏との社會問題に關する談話』がある。之は「五・四運動」が上海に波及して同地に總罷業が勃發した時、同地において戴季陶の質問に答へて、孫文が共產主義思想やその運



動に對して有つてゐる見解を述べたものである。戴天仇は上海の總罷業を見て「勞働者が直接に政治や社會運動に参加することは既に幕を切つて落された」と思ひ、中國の有識者が之に對して「溫和な社會思想」を以て、民衆を指導することが必要であらう、と述べた。之に對して孫文は、三民主義こそ正にその思想なのである、と答へてゐる。さうして共產主義的革命運動に對しては、「かかる不健全な思想はたしかに危険である」が「之もまた過渡期において自然に發生する事實に過ぎない」「かやうな経路は概ね思想混亂時代の必然性で有害ではあるけれども、しかしまた、さう無暗に心配したものもあるまい」と云ふ樂觀的な意見を三民主義に對する絶對的確信をもとづいて吐いてゐるのである（第三卷、三七五頁）。

〔註〕孫文の「五・四運動」の評価は、それが契機となつて中國の思想界に革新的な空氣が漲り、民族革命のために必要な思想運動が勃發したと云ふ點で、價值を有つと云ふにあつた。そして共產主義思想が中國において發展してゆくかどうかと云ふやうなことは、その際問題とされなかつたのである。この評價は、彼が革命運動のために英文機關新聞と印刷機械とを有つ必要を説いて、それへの物的援助を海外の同志に向つて懇請してゐる手紙において現れてゐる（『海外國民黨同志へ』——千九百二十年一月——第七卷、四三九頁以下）。

中國革命の方法としては云ふまでもなく、三民主義との論理的な關係においてすら、共產主義が認識されてゐなかつたことを、われわれはここに明瞭に看取することができるし、また確認しておかなくてはならない。前期の民生主義思想が動搖しはじめた時にも、孫文は共產主義に近づかうなどとは思ひもよらなかつたのである。

## 二

孫文が千九百二十一年七月に第三インターナショナルの代表マーリンと會見し、次いでヨッフエ、ポロディン

と交はるに及び、彼の共產主義との接觸は漸次に濃厚さを加へ、ボロディンを國民黨顧問に推舉した彼は、千九百二十三年の終りには國民黨改組に乗り出し、翌年一月、國民黨第一回全國代表大會において聯俄容共政策を決議するに至つて、彼の革命意欲は一大轉換を遂げたかに見える。その會議の開催中、レーニンの計報に接して、ソヴェエト・ロシアに弔電を送り、弔意を表するために三日間を休會とし、ボロディンからレーニンの革命事業を聴取すると云ふ偶發的な間劇をも交へて、三民主義は劃期的な、云はゆる「發展」を遂げたかに見える。果たしてこの國民黨の改組は、三民主義ことに民生主義の大轉換を意味してゐたであらうか。われわれの注意は専らこの點に注がれる。

孫文はロンドンに滞在中、ロシアの革命家と露中兩國の革命の將來を論じて、中國革命がロシア革命よりも速かに成就されるだらうと述べて、相手のロシア人を驚かしたことがある。その後、千九百五年には、同年に起つたロシア革命が君主政體を顛覆する政治革命であると云ひ、『中國民主革命の重要性』第六卷、五九頁以下)、帝制ロシアに對する反感は『中國存亡問題』(千九百十七年)におけるロシア觀にも極めて明白である。彼が千九百十七年五月のロシア革命にはじめて言及したのは、先にも引用を試みた「知難行易」説を最初に掲げた「之を行ふは難きにあらず之を知るを難しとす」と云ふ千九百十七年の講演の中においてであるが、そこでは「昔日專制國家たりし露國が現在共和に變じた如き事實も以て時代の潮流を窺ふに足るであらう。時に順ずれば興る。帝制は今や全く永く存在しえないものである」と云つてゐる。之は中國より遅れて起り帝制を廢したロシアを以て中國の後進者と見做し、それに慶賀の意を表明した言葉であつて、共產主義に關して觸れられてゐるのではない(第六卷、

二四九頁)。ところで、十一月革命以後のロシアの國情は孫文に新しい注意を呼んだにちがひない。しかし、われわれは彼からロシアについて新しい種類の見解を直ぐには聴くことができない。千九百二十一年六月に至つてはじめて、彼は『三民主義の具體的方策』の中で共產主義國家ロシアについて語つてゐるのである。曰く「最近の露國革命の如きものについては、ソヴェト政府は民生主義に重きを置き、民族主義については大いなる意味はなく、民権主義に至つては革命の附屬物に過ぎぬと考へてゐる、と説く人がある。これ亦我黨と異なる點である」と。この時においても、彼はロシアの民生主義中心の革命に對して、三民主義と五權憲法との中國革命が一層具體的であると云ふ口吻を洩らして、自らの民族主義がウイルソンの民族自決論の主張と一致する所以を説いてゐるのであつて、ソヴェトに對する深い關心がまだなかつたことを示してゐる(第三卷、二九三頁以下)。

しかるにその翌月、すなはち千九百二十一年七月に、孫文は第三インターナショナルの代表、マーリンと中國共產黨の領袖、李大釗とに桂林において會見した。さうしてこの時から漸くロシア革命に對する認識が變化を見せはじめるのである。だがその變化も急速と云ふわけではなかつた。同年十二月の演説『三民主義は新世界建設の工具である』においてロシアに關して云ふところを引けば、「露國は近來政治革命と同時に經濟革命を實行し、一面には皇帝と貴族とを打倒し、同時にまた資本家を倒した。現在露國民が受けてゐる苦痛は非常なもので、革命の結果如何は今日之を豫想することができない」とあるのを見る(第六卷、三一六頁)。マーリンの宣傳や李大釗の説得にも拘らず、孫文はソヴェトに對してまだ積極的な認識に進まうとしてはゐなかつたのである。

ソヴェトに對する積極的な認識は、その翌年の千九百二十二年の一月以後に見える。桂林における雲南・廣

東・江西各軍に對する演説『軍人の精神教育』が之である。そもそも軍人に對する精神教育、すなはち革命軍の精神教育の必要を感じたと云ふこと自體が、ソヴィエトの革命軍の先縦なしには考へられず、以前の孫文は革命軍と云ふものに積極的な意義を認めようとはしなかつたのである。ところが今や軍人に對して革命意慾を鼓吹しようとはじめた。之ソヴィエトに對する認識の深まつたことを物語るものでなければならぬ。それゆゑ、われわれはこの講演の内容に若干觸れておかう。孫文は軍人の精神教育の要點を智・仁・勇の三點に分かつて説明してゐるが、その仁について曰ふ、軍人の仁とは「救國の仁」でなくてはならない、と。「救國の仁」であるためには、國家の政策を知悉してゐなくてはならず、中國の革命にたづさはるためには、三民主義を理解するところがなくなくてはならない。英米の社會問題について觸れて後、孫文は次の如く云ふ。「露國現在の新政府の如きはすなはらことに鑑みて政治革命と社會革命とを同時に實行した。所謂勞農政府とは換言すれば農工兵の政府であり、農・工・兵を以て組織成立した政府である。この新政府は獨り君主專制を顛覆せるのみならず、同時に資本家專制の打破をも實行した。これいはゆる社會革命であり、またいはゆる民生問題でもある。各國は此主義が國內に傳播して、人民がその影響を受けて、起つて之に倣はんとするのを深く恐れてゐる。故に聯合して露國と戦ひ、今日四ヶ年に及ぶが、露國に勝つを得ない。之は露國の主義が勝れてゐるからである」と(第五卷、七五頁)。

歐米資本主義諸國の理論よりも共產主義の理論が優れてゐると云つたこの講演は、孫文の民生主義思想の重要な轉換を示してゐる、と云ふことができる。實際この時以後、共產主義への接近は急角度を以て密接となるのである。このことについては後に述べるとして、この講演について二つの理論上注意してよい問題がある。その一

つは、孫文が従來民生主義において直接問題としなかつた労働者が、中國革命戦線の中に加へられて考へられ、しかも労働者が革命軍との聯關において考察されてゐると云ふ點である。前期の民生主義では、「平均地權」にしろ「節制資本」にしても、労働力の問題に對しては一顧さへされてゐなかつたと云つてよい。中國民族の龐大な人口からは、資本主義的經營に必要な労働力が極めて容易に造出されると考へられてゐたが如くであつた。のみならず、軍隊そのものも、革命理論とは無縁の存在であつたと云へる。しかるにこの時に至つて、労働者と軍隊との問題が相關聯するものとして、民生主義にも考へ加へられようとしはじめたのである。従つて軍人が民生主義に關して知るべきは、労働力と兵力との供給源としての農村についての問題である、とされたかに見える。なぜなら、この講演で説かれてゐる民生主義は専ら「平均地權」論であつて、「節制資本」論に觸れられてゐるところはないからである。次に第二に注意すべき問題は、革命と軍隊とが結びついて考へはじめられた當然の結果として、革命が成功した暁における軍隊の問題およびその時における世界の情勢について豫想である。この中、初めの問題は直ぐ後で論ずるとして、後の問題について孫文は「孔子の理想社會が眞に實現しうれば、欲すべきものなく、従つて民は争はず、軍隊も亦不必要とならう。今日露國の創設せる新政府は頗る之と酷似してゐる」と書いてゐる(同書、九一頁)。ここに云ふ孔子の理想社會とは、云ふまでもなく大同世界のことである。大同世界と共産主義的世界社會とを酷似せるものと見るこの言葉の中に、われわれはソヴェエトの宣傳が孫文の年來の世界像に共鳴を呼ぶに至つた経過を歴然と讀み取りうるのではあるまいか。

さて、残された第一の問題について述べよう。革命と労働者と軍隊とを聯關するものとして考へられた當然の

歸結が、千九百二十二年六月以後、孫文が宣傳に力を盡した「裁兵」運動であつた。『工兵計畫宣言』(千九百二十二年六月)『和平統一の通電』(千九百二十三年一月)『兵を化して労働者とせよ』(同年同月)『裁兵實行の宣言』(同年二月)『裁兵の重要性とその處置方法』(同年三月)などは、この運動のために盡した孫文の活動を如實に傳へてゐる。

〔註〕「裁兵」とは革命の破壊的側面に従事する兵士を國民經濟建設のための産業戰士となすことを意味する。彼が「裁兵」によつて期待した効果は二つあつた。一つは「裁兵」によつて中國經濟の資本主義化のための組織された労働豫備軍を造出するとともに、革命後の兵士の民生問題の解決を圖るところにあり、二つは軍閥の割據・鬭争を不可能ならしめて、中國の政治的統一を創り且つ維持すると云ふことである。孫文が千九百二十二年の八月にヨッフエと會見し、その翌年の正月に「共同宣言」を發してゐることは周知の事實である。上記の「裁兵」を論じた『和平統一の通電』がこの「共同宣言」と目を同じうして發せられてゐると云ふ事實は、この運動そのものがソヴイエトの忠告に基くと考へられる時、決して偶然の一致とは云へないであらう。

〔註〕「裁兵」の意義とその方法とは以下の言葉が明かにするであらう。「争端發して以來、兵數は従前と比べて倍加するに至れり。而して此等の兵士は民間より來たる者にして、不法武力のために驅使さるはその本意にあらず。而も一旦裁撤されんか、驟かに業とする所を失ひて安んずる能はざるものなり。故に次を追ふて之を改めて工兵となし、統率編制等は一切舊の如くし、其の武器を回收して與ふるに工具を以てし、毎日六時間乃至八時間の作業に服せしめ、先づ道路の開築より始めて次第に他の工事に及ばし、月給は現時に倍加し、月俸百元以上のものには五割を加給し、百元以下の者には倍額を給與することとし、此の外作業によつて生じたる純利は、一半は國家の有とし、一半は工兵に歸せしめ、人數に按んじて均分して差等なからしむるものとせば、一轉移の間に戰事を工事に易へ、兵は業を失はず、身を挺んで險に走るの慮りなきを得べし。而して工事に繁く生産發達の象有るに至れば、善く外資を收めて之を實業に投じ、以て積年の疲弊を起して社會の繁榮を謀らば、

危を轉じて安と爲すを待べし」(『工兵計畫宣言』第四卷、五三、五四頁)。之によつて明瞭であるやうに、孫文の理想においては、工兵を雇傭するものは國家社會主義を施行する政府だつたのである。すなはち「節制資本」はそれに從屬すべき労働者を兵士に見いだすことによつて、國民經濟の開發と内亂の終熄と民生問題の解決との一石三鳥の策となりうると考へられたのである。

ソヴィエトとの接觸は更に進む。千九百二十三年の十月、ボロディンが國民黨の顧問に就任するや、ソヴィエトの力は單に孫文の頭腦と中國共產黨の活躍を通して中國社會に影響を及ぼすに止まらずして、國民黨の組織そのものに一大轉換を起さしめた。

その年の十月の孫文の獅子孔『主義宣傳は黨を以の國を治むるの第一歩』は、中國革命がロシアに倣つて一黨を以てその目標とすると云ふ最初の宣言であるとともに、三民主義の宣傳による啓蒙運動をば彼が千九百十二年以後ふたたび熱烈に始めた一連の講演の劈頭を飾るものである。彼の革命運動のこの新しい動向の具體化が、國民黨の改組であり、軍官學校の設立であり、又『三民主義講演』であつたことは、詳しく述べる必要はないであらう。實際その時以來の孫文のソヴィエト觀は以前と全く變つてゐるかに見える。辛亥革命におくることと六年にして漸く革命に成功したソヴィエト・ロシアを、孫文ははじめは同じ革命意慾を遂げた後輩として遇してゐたが、今やその後輩を師と仰ぐに至つたのである。われわれはこの轉向の心境を示す彼の言葉の過剰に苦しむのであるが、ここにその一つを擧げておかう。

「露國の革命は六年にして成功したが、吾國の革命は十二年を経て今尙ほ成功しない。之は何が故であるかと云ふに、我黨の組織方法が良くないために、何等の效果をも擧げえないのである。フランスの革命は八十年にして成功し、米國は八年の血

戦を経て始めて獨立するを得た。此等は必ず成功すると云ふ革命の方法がなかつたからであるが、現今露國のみは此方法を有つてゐる。我黨は是非この方法を學ばねばならない。即ち黨人各個が主義のための奮闘を實行し、軍權の掌握に汲々たることなく、軍權は之を監督して自己のために利用する程度に止むるのである。露國革命の成功は、その全部を兵力によつたものではなくて、實に宣傳の力によつたものである」(千九百二十三年十二月、『黨員は應に軍隊と協同して奮闘すべし』第五卷、二四二頁)。

われわれは孫文とソヴィエトとの接觸の深まりと共產主義の中國革命の理論に及ぼした影響とを辿つて來た。

彼が前期におけると異つて、太平天國の思想を共產主義と同質のもの<sup>〔註一〕</sup>と云ひ、また支那古代の井田法や限田法を

ば共產制度と同一視しはじめた事實、<sup>〔註二〕</sup>更には労働者や農民と國民黨との連繫に力を盡した事實などは、實際、革命

運動上の著しい相違を示してゐると云はなくてはならないであらう。われわれの問題は、この著しい相違と見えるものが果たして民生主義思想の本質をば、前期におけると全然異らしめてゐるのであるかいなかと云ふことを究明することにある。しからばこの究明に當つて、手がかりは何處に求むべきであらうか。

〔註一〕 前期の民生主義の立場からは、太平天國の亂は結局中國民族社會内部の種族闘争にすぎず、近代的な民族革命ではない、と云ふ評價が與へられてゐた。しかるに後期においては、この評價は次のやうに變へられた。洪秀全の革命が成功しなかつたのは、外交上の失敗すなはち外國の援助を得なかつたことにあると云はれ(千九百二十三年二月、『兵を化して労働者とせよ』第五卷、一一三頁)、また洪秀全は民生主義の先驅者と仰がれるに至つてゐる。孫文は語る「民生主義は數十年前において既に之を實行した人がある。其人とは誰であらうか。すなはち洪秀全その人である。洪秀全は太平天國を建設したが、その實施した制度は、當時の所謂、工人が國家を管理し貨物は國家の所有となすもので、完全に經濟革命主義であり、今日の露國の共產主義である」と(千九百二十四年一月、『三民主義の實行と新國家の改造』同卷、一五頁)。

〔註二〕 「諸君、民生主義とはどんなものか、あるひは尙ほおわかりにならぬかも知れぬ。知らず、中國幾千年前、既に早くも此の主義を實行したことがあることを。周朝のとき實行した井田制度、漢朝王莽の考案せる井田方法、宋朝王安石の實施



せる新法の如きは、みな民生主義の事實である云々」(千九百二十三年十二月、『三民主義は舊思想打破の主義』第五卷、二一七頁)。

【註三】 この方面の孫文の努力については次の講演について見られる。千九百二十四年のメイ・デー、労働組合員に對して行つた『不平等條約と中國労働者』、同年八月、農民と國民黨との懇談會における『農民大聯合』、同年同月、農民運動講習會における『耕作者は田を有たなくてはならぬ』(第三卷、二一八頁以下、二六七頁以下、二五二頁以下)。

## 三

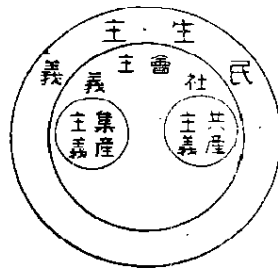
問題の解決の鍵が孫文の晩年の記念すべき『三民主義講演』(千九百二十四年一月より八月に至る)であることは、詳しく述べるまでもないであらう。しかしこの未完の大講演は、民生主義に関する限り、後に明かにする通り思想的混亂を含んでゐて——この混亂は實は孫文の立場に特有のものであつてこのことも我々の結論が明かにするであらう——讀むに警戒を要するのである。そこでわれわれはこの講演の分析にたづさはる前に、孫文が後期の民生主義思想を、社會主義の諸派との比較において、極めて卒直に論じてゐる一つの講演から、分析の筆を起さうと思ふ。それは第一回全國代表大會の席上で行なつた『民生主義の説明』である。

孫文のソヴェエト心酔への急角度の轉向が、舊き國民黨の同志に著しい危惧の念を生ぜしめたことは、怪しむに足りない。ましてや、黨の改組にあつて、個人の資格においてにせよ、中國共產黨員の國民黨入黨をゆるすに至つては、この危惧は疑心暗鬼を生ぜしめるに十分であつたであらう。本來國民黨の強化を計つたはずである改組が、却つてその分裂・弱化の危険を孕んだことは想像に難くない。ここにおいて、孫文はあらゆる誤解を一掃する必要に迫られ、民生主義の本義と信ずるところを、この講演において明かにしようとしたのである。彼は

語りはしめる。

「我黨多數の同志はこの主義に對しては、從來きして心に留めて研究したことがない。故に近來この主義について誤解を生み、誤解は疑ひを生み、懷疑は暗流を生んだ。現今既にかかる現象を生じて將來分裂の兆があり、面白からぬ結果を發生することをおそれる。故に本總理は、この主義に對して再び分解説明しなければならぬ。冀くば我黨の同志諸君、此の主義から發生するところの誤解・懷疑・暗流を完全に打破して、最も有力なる國民黨たらしめんことを（第五卷、二九〇頁）。

國民黨内部の誤解は「老同志の穩健な思想」と「新同志の急進思想」との相尅より起る。さうしてこれは「民生主義の眞諦を双方共に誤解する」ことに基いてゐる。急進主義者は、三民主義がソヴィエト・ロシアで賞揚されてゐると云ふ理由で、國民黨に加盟しようとしてゐるのであり、舊同志なかんづく華僑は帝國主義列強の宣傳に毒せられてこの主義を理解することができないのである。かう述べて、孫文は「聯俄容共」の利害と是非とに及び、民生主義がこの新政策によつて毫も存立の基礎を失ふものでないことを強調する。何となれば「民生主義は所謂社會主義、共產主義および集産主義をことごとくその中に包含してゐる」ものであるからである（同卷、二九三頁）。



孫文はこのことを上の圖を描いて示してゐる。彼はつづいて云ふ、「民生の二字は數千年前から既にある言葉であるが、之を政治經濟に使用したのは本總理に始まり獨り中國に於いてこのことあるを聞かぬのみか、外國でも殆んど見當らない」と（同所）。ゆゑに、理論的に云つても、民生主義は孫文独自の思想であるから、共產主義に壓倒される惧れはない。また實踐的に云つても、既に見たやうに、共產主義の實行はロシアではじめて行はれたものではなくて、「我國では數十年前洪秀全の太平天國において既に

實行され、且つその効果も露國に比較して更に大であつたが、英國のゴルドンに破壊されてしまつた。故に今日は考證すべきものがない。露國の今日實行してゐる政策の如きは實は純粹の共產主義ではなくて、民生問題を解決するための政策にすぎないのである（同卷、二九四頁）。そこで次のやうな結論が生ずべきである。「我黨の同志諸君はここにおいて共產主義と民生主義とは毫も衝突するものでなく、範圍に大小あるのみであることを了解されるであらう。諸君は既によく民生主義の眞意義を明白にされたのであるから、爾今新舊の同志は誤解懷疑より生れた暗流を之によつて消滅せしめられるであらう（同所）。以上が民生主義の新しい規定である。われわれはこれから何を發見せねばならないであらうか。

前期の民生主義の規定では、それは國家社會主義と云ひ換へられてよいものであり、國家社會主義は集産主義の中に含まれる概念であつた（千九百十二年の『社會主義の分派と其の方法』第六卷、一一九頁以下參照）。一體に孫文の社會主義諸派に對する認識は極めて不明確と評する外はない。それは國家社會主義を集産主義と云ふ概念の中に入れ、無政府主義を共產主義の一種であるとす程度に認識であるにすぎない。ところで、前期においては、集産主義の一種と云ひ換へられてよかつた民生主義が、ここではその狭い範圍を越えて一切の社會主義の諸派を内に含み、それらの上位に立つ概念であり、それゆゑにどの分派よりも一層具體的な思想である、と自讃されるに至つてゐるのである。之は民生主義の一層具體的な内容規定と云ふことができるであらうか。或は逆に、一層抽象的な一般的規定への後退と云はなくてはならないであらうか。

わたくしはその後者を以て答へる。民生主義が集産主義の一種から一切の社會主義を包括するもの、いな孫文

の言葉によると更に大飛躍して「一切の經濟主義を包括してゐる」とされるとき、その概念の内包は著しく抽象的に、空虚にならざるを得ない。この規定は民生主義を經濟政策の原理一般と云ふに等しく、之で以て民生主義をその誤解・懷疑・暗流から救はうとするが如きは、木に倚つて魚を求むるの類ひである。もしも民生主義が眞實に共產主義その他の思想から明確に區別さるべき豊富な内容を有ち、それらを所謂止揚しうる具體的な眞理であることが證明しうるものであるならば、このやうな抽象的・一般化への後退、逃避によつて認證されるのではなく、他のそれぞれの思想の内容に這入りこみ、經めぐり、それらとの嚴密なる對質を通してそれらを突破し、それぞれの抽象性を正確に指摘し、逆にそれらの思想をば自己の抽象面に宿してゐるものであることが明かにされなくてはならないはずである。さうはせずして、上記のやうな抽象的・一般化への後退によつては、孫文の意圖とは全く逆に、民生主義はその誤解・懷疑・暗流を層一層倍加するにすぎないことになるであらう。國民黨改組以來今日に至るまで、民生主義の辿りつつある分裂は、正にこの點より理論的に了解されると云はなくてはならぬ。

しかしながら、上の講演よりして、もしも民生主義の本質が孫文の期待したやうに明かになつたと云ふ側面があつたとするならば、それは何によつてであらうか。われわれはこの問に答へることによつて、中國において民生主義が有ちえた、また有ちえてゐる革命理論としての意義を、一層具體的に認識しうるのではないかと思ふ。

われわれは民生主義の理論の内容から一度離れる。さうしてその中國民族に對する實際的な印象なり中國人の了解の仕方なりに移つてゆく。問題は中國民族の知性に係つてゐる。中國人が分析的思考に乏しいことは、例

へば林悟堂も述べてゐる通りであるが (Lin Yutang, *My Country and My People* p. 83) 孫文もまた、民生主義を明かにするに分析的方法を以てすることはできなかつた。わたくしをして敢へて云はしめれば、さうはせずして古典思想以來傳統的な「名ヲ正ス」方法、云はば「正名的方法」に由つて之を試みたと云へないであらうか。「名ヲ正ス」の典據は孔子の「名正シカラザレバ則ラ言順ハレズ、言順ハレザレバ事成ラズ」(論語、子路第十三)に求められるのであらう。さうして「名」が中國においては「事」よりも高次の實在性を有つものと思考せられることは注目すべき事實である(この點については高坂正顯博士「支那人の歴史觀」『東亞人文學報』第一卷第四號、二三頁以下参照)。中國人の知性は、思想の内容をではなくして思想の名を正すことによつて、それを了解する傾向がある。

しかも「名ヲ正ス」はしばしば名を空間的に配列することによつて遂げられる。先に寫しておいたやうな圖形が中國人の正名的思惟の典型的な例を示してゐるであらう。従つて、孫文の意識においては、上の圖形は民生主義の本質を正名的思惟によつて明かにしえたのであり、またその講演を聞いた國民黨員も、民生主義が共產主義よりも更に具體的な思想であることを了解しえたと思つたに相違ない。のみならず、孫文自身が誇示したやうに、民生主義の概念が孫文自身の發案にかかるとあり、中國人獨自の思想を含んでゐると云ふ先入見は、中華思想と結びついて、民生主義の本質が明かにされた、と獨善的に孫文にも聽衆にも思はれたのであつたらう。

〔註〕孫文みづからわれわれの解釋を正常づけるかのやうに云つてゐる。「この社會問題こそはすなはち今日說かんとする民生主義なのである。余は本日何が故に直接外國を學んで社會主義と云はず、民生なる古い名詞を持ち來たつて社會主義に替へようとするのであるか。之は非常に道理のあることで、われ等は此の點大いに研究せねばならぬ。……社會主義の發生は既に數十年前のことに屬する。けれどもこの數十年の間、歐米諸國では社會主義に對し未だ一つの解決方法も發見するに至ら

ず、今も尙ほ劇烈なる闘争の中にある。此の種學說と思想は現在中國にも流入し來たり、中國の一部の新學者亦之を研究しつつある。……中國の學者は社會主義と共產主義とを併せ研究して一つの解決方法を發見せんとしてゐるが、之また非常に困難なことであらう。……社會學の範圍は社會の情狀、社會の進化および群集結合の現象の研究にあり、社會主義の範圍は社會經濟および人類生活問題の研究すなはち人民の生計問題の研究にある。故に余は民生主義を以て社會主義に更へたのである。その本來の目的は社會問題の本を正し源を清め、またこの問題の眞性質を明かに表明し、そして一般人が此の名詞を聽いて直ちに了解するやうにするにある」『三民主義講演』第三章、第一講、第一卷、三四〇、三四一頁。

#### 四

われわれは、後期の民生主義の變容と覺しきものが、共產主義への轉向であるのでは決してなく、實は前期の民生主義の成立にあづかつたやうな歐米思想の中國人的な攝取の仕方を使、一層明瞭にしただけに過ぎないと云ふことが、以上において了解されらると思ふ、後期の民生主義は、前期のその自己批判と共產主義への接近とによつて特徴づけられるのではなくして、却つて歐米の政治的思想的混亂に直面して、前期における思想のオリヂナルへの失望から、さうしてソヴェエトのブルジョワ思想の批判と自己宣傳とに乗ぜられつつ、みづからの據るべき根據を失ひ、遂に歐米思想から離別して、中國の古典思想に最後の根柢を、いな一層正確には避難所を求めようとしたところに成立したのである。

しかしながら、このことは孫文が古典的支那思想の深き教養を有ち、それを根據として歐米思想を包み取り、眞に思想の傳統を生かさうとしたのではないことが強調せられねばならぬ。孫文の民生主義の成立に與かつたのは、飽くまでも歐米思想であつた。その歐米思想によつては遂に彼の革命意欲が達成されないことを見た時、彼

の失望はそれだけに一層大きかつたにちがひない。けれども、青年時代に近代の歐米思想に心酔し、古典的な支那思想を深く究めることのできなかつた彼の頭腦は、一方では矢張り歐米思想に自らの友を發見しようとする努力を惜しまなかつたし、他方ではそれとならんで、常識的な古典思想の知識から最後の據り所を求めさがさうとせざるを得なかつたのである。

常識的な古典の知識を孫文について指摘することは容易である。われわれの之までの叙述が之を果たしてゐると云ふこともできよう。それゆゑ、更に改めて論ずることを止めよう。ただ歐米思想を離別する必要を痛感しつつも尙ほその中から友を發見しようとした彼の努力について一言しておく必要がある。それは、孫文の晩年の思想に一つの論據を提供したとも見られるモーリス・ウィリアムの思想と民生主義との關係である。アメリカ人、モーリス・ウィリアムの『社會史觀——マルクスの唯物史觀の論駁』(Maurice William, *The Social Interpretation of History A Refutation of the Marxian Economic Interpretation of History*, 1921) に関して孫文がはじめて觸れてゐるのは、あたかも上述の「民生主義の説明」と云ふ講演においてであつた。彼は民生主義が彼の獨創に成るものであることを述べ、それにつづけて云ふ。

「數年前マルクスを信奉する學者が社會問題を研究して、社會の生計問題とマルクス學說と符合せぬ點を發見した。そこで疑義を提出して逐條例擧し、社會黨に解答を求めたが、一年の久しきを経てなほ一人として求めに應ずる者がなかつた。よつて著作を公けにして世に問ひ、名づけて『社會史觀』と云つた。その要點の大意は、今日社會進化の中に在つて、その經濟問題たる生産と分配とは悉くまさに民生問題の解決を以て歸着點となすべきである云々、とある。之によつて本總理の創意した民生主義なる名詞は、今日に至つては、既に學者が賛同してゐるものであり、また民生の二字が實に一切の經濟主義を包括してゐることを知りうる(第五卷、二九三、二九四頁)。

ところでここに云ふ學者とはウィリアムのことである。前記の著書の序文によれば、彼は四半世紀のあひだアメリカの「社會黨」の一員として社會問題に關心を寄せ、マルクシズムの研究に従つてゐたが、數多くの疑問を懐かざるをえなくなつて、遂に千九百二十年に前記の著述を私費で出版、之を社會黨の幹部に送つて批判を請ふたのであるが、一年を経ても満足すべき解答に接しえなかつたので、翌年之を公刊に附したのである。孫文がこの書物を既に讀破してゐたと云ふ事實は、彼の旺盛な讀書力と、ソヴェエトの宣傳にも拘らず、唯物史觀に對する自主的な検討の意志を有つてゐたことを示すものとして注目すべき事實であると考へられる。

さてウィリアムの思想の影響が歴然としてゐるのは、『三民主義講演』においてである。しかもこの影響については、ウィリアムみづから後に『孫文對共產主義——民主主義國家擁護に對する支那の權利を確證する新しき證據』(Sun Yat-sen Versus Communism New Evidence Establishing China's Right to the Support of Democratic Nations, 1932) と云ふ一書を物して、自説の宣傳的效果をねらつて、煩雜なまでに執拗な説明を繰返してゐるのであつて、後期の民生主義を論ずる場合には、この影響は見逃してはならないものである。だから次にこれについて簡単に記しておかう。

『三民主義講演』において、孫文がマルクスをば一方では「社會黨の聖人」として禮讃しながら、他方では「社會の病理學者」であるけれども「社會の生理學者」ではないと云つて批判してをり、前後整合を缺いてゐるところは、この講演の讀者の直ちに氣付き且つ怪しむところであるにちがひない。さうしてこの批判的部分は悉くウィリアムの『社會史觀』からの引寫しなのである。孫文みづから、ここでは、先の「民生主義の説明」のときと



はちがつて、ウィリアム（威廉氏）の名を擧げて書いてゐる。

「近來米國の一人のマルクス信徒威廉氏は、深くマルクス主義を研究し、自己同門相互の紛争には確かにマルクス學説に十分な點があるに相違ないと結論に到達した。彼は意見を發表して言ふ、マルクスは物質を以て歴史の重心としたがこれは間違ひである、社會問題こそ歴史の重心でなければならぬ。そして又社會問題の中でも生存を以て重心とする」と。生存を社會問題としてこそ合理的である。民生問題は即ち生存問題である。この米國學者の最近發明せるものは、適々我黨の主張に符節を合したるものと言ふべきである（第一卷、三五三頁）。

ウィリアムの社會史觀の要點は、歴史の推進力が生存問題 (problem of existence) を解かうとする人間の努力である、と云ふに盡きる。さうしてこの史觀は社會進化論を奉じてゐるのである。孫文はこの problem of existence をば民生問題と解して自説の援用に資さうとしたのみならず、彼一流の「知的正直さ」と「機會主義」とを以て、このアメリカのブルジョワ民主主義者の主張をそのまま自説の如くに説いたのである。

この社會史觀は、マルクスの史觀に對して對抗できるだけの思想内容を備へてゐると云ふことはできない。孫文に對するこの史觀の影響を立入つて指摘することは、われわれには必要ではない。必要とあれば『孫文對共產主義』を播けばよい。だが此著述によつて後期の民生主義について誤解を生ずるおそれがある一つのことについてここに述べておかななくてはならない。ウィリアムの主張の力點は、『三民主義講演』の中、「民族主義」と「民權主義」とが千九百二十四年の一月下旬から四月下旬までの間に、原則として毎週開講せられてゐるに對して、「民生主義」の開講は八月上旬以後であり、その間三ヶ月以上の間隔があることに着目されてゐる。孫文は不健康のゆゑにこの中斷を餘儀なくされたのであつたが、ウィリアムはそれをば、四月までの孫文はマルクスの信奉者

であり、八月以後その批判者に轉向したのであり、それはその間に彼がウイリアムの著書を播いて翻然として四月までのマルクス信奉の迷夢から醒めたのである」と解いてゐる (Maurice William, Sun Yat-sen Versus Communism p. 32 ff.)。たしかに「民族主義」の中にはマルクスに對する批判的言辭は見いだせず、それは「民生主義」に至つてはじめて現れてゐる。けれどもこのことは孫文の立場の豹變を示してゐるのでは決してない。われわれが既に見たやうに、その前年の末までに孫文はウイリアムの著書をよんでゐたのであつて、『三民主義講演』の英譯本のみから三民主義を解かうとしたウイリアムがこの誤解をしたのも無理からぬことではある。けれどもこの誤解が民生主義の本質を歪曲する結果を招く限りにおいては、われわれは斷乎として批判を行はなくてはならぬ。孫文は、ウイリアムが主張するやうに、千九百二十四年の四月までマルクスの信奉者であつたのではなかつたし、また八月以後から社會史觀の全面的な支持者となり、ウイリアムのやうなマルクシズムの批判者として登場したのではなかつたのである。ただ従來のヨーロッパの社會思想の中國革命に對する無力について失望した孫文が、退いて古典的支那思想を以て民生主義を再編成しようとはしたものの、その能力もなく、またマルクシズムに對しては遂に共鳴することもできず、たまたま自らもその信徒である社會進化論を奉ずるウイリアムの著書に避難所を見いだし、知的正直と云ふ生來の性格から機會主義者流に、それを援用し祖述したと云ふにすぎないのである。ウイリアムの憶測は、彼が三ヶ月以上の病床生活中、恐らくは中國共產黨の跋扈に對する老同志の危惧や忠告のために、マルクシズムに對して積極的な批評を行なふ必要を感じて、ウイリアムの著書を読み返して参考に資したと考へられる限りにおいては、正しいであらう。けれどもこのことを以て民生主義の本質が反マ

ルクスの變化したとなすのは、ウィットフォードが孫文の晩年の活動を目して、マルクシズムの境涯に到達したとするのと全く逆な、しかし同じく抽象的な把握なのであつて、ウィリアムの自己宣傳とアメリカの帝國主義の傀儡とならうとする意欲とを、われわれはここに觀破するのである。なぜなら、千九百三十二年のアメリカは、大統領フーバーの下に、中國に對する積極的な帝國主義的政策を強行したのであり、著者は中國がブルジョア民主主義的な國家であることを證明して、アメリカの資本の中國への進出をそり立てることによつて、その政策に思想的援助を與へようとしたと考へられるからである。

われわれはウィリアムについて餘りに多く語つたかも知れない。しかし後期の孫文の心境をうかがふために、ウィリアムは一つの好箇の資料を提供してゐるのである。要するに、後期の民生主義の變容と覺しきものは、實は決して本質的な立場の變化から生じたものではなく、前期におけると同じ革命意欲に燃える孫文がその中に立つてゐるのである。その意味で、民生主義は一個同一の本質を宿してゐたと云はなくてはならない。但し、孫文の意欲の前に展開された政治的思想的諸條件は、前期に比して著しく尖鋭化した。歐洲大戰後の帝國主義列強は、武装を新たにして、あるひは共々に、あるひは相敵對し合つて、近代國家たらんとする中國をば好箇の獲物と眺みかかつて來た。孫文は前期における列強への大きな期待を裏切られ、東洋人的自覺の必要を痛感したけれども、それに基づいて新しい理論を構成するだけの能力を彼は有つてはゐなかつた。他方、歐洲大戰の結果の一つはロシアの革命であつた。新しい社會の曙光がそこから射しそめるかに彼には思はれた。資本主義的列強から振り切られ、自らの魂をしかと握りそれを磨み上げえなかつた手をばソヴェエトに伸ばしつつ、孫文は逝つたのであ

つた。

われわれは『三民主義講演』の中の民生主義そのものの内容に立入ることをしなかつた。それは前期の民生主義を分析し、後期におけるその變容と覺しきものの本質をば解明してきたつたわれわれには、その必要は最早ないと信ぜられるからである。最後にただ一つのことを記しておかう。それは『物質建設』が前期の民生主義のクライマックスと云ふ意義を有つに對して、この講演に收められる民生主義が、後期のそのクライマックスを形づくると云ふことである。さうして、前者が中國における國民經濟建設の具體的方圖を示すならば、後者はその建設の基本方策とともに、國民經濟成立後の中國民族に期待しうべき經濟生活を、衣・食・住・行の全面に亘つて説き明かさうとしたものである。兩々相まつて孫文の民生主義の了解に資すべき文献であるとしなくてはならない。